

オランダ研修旅行 レポート

藤木 直人

参加者

(株)山喜農園 社長 森山 隆氏
津南ユリ切花組合
副組合長 河田 太郎
江口 裕
藤木 直人
近藤農園 近藤 秀人氏

研修期間

12月4日(日)～12月11日(日)

目的

オランダの球根生産流通システムは複雑であり、それに携わる会社毎に球根に対する考え方やパッキング方法が異なっている。それらを把握認識することで今後の切花生産につなげていきたい。

12月4日 北オランダ



オーナー型球根農家 W. v. Lierop (ファン, リーロップ)

オランダ農家では、1・2を争うほどの面積と球根品質がトップクラス。300haの面積をやり、ユリ、チューリップやスイセンなどを行っている。生産地のたまかな内訳は北オランダで60%、南オランダで40%である。原母球はほぼ北オランダで生産管理を行っている。

今年は雨続きがあったため、プール状態の圃場が続き球根が充実せず4.5haは水害でやられてしまったという。

新たなウィルス対策として、球根を洗浄する時に使う洗浄水に紫外線(UV)を当てていた。まだまだ改善の余地があるということだが、今後に期待できそうな新技術であった。



オーナー型球根農家 BOLTHA (ボルタ)

ユリ、チューリップ、ユスカリなどの球根生産を行っている。120haのユリの面積を持ち、フランス産は5ha栽培している。

この農家では自社球根の品質をガラス温室で栽培して、コンディション毎の状態確認を行っている(オランダにおいて先駆けて)。

オーナー型球根農家 コーイマン

ここの農家の責任者は33歳と若い経営者だ。球根選別レーンは1ラインで行い作業員数も少ない。そのため、球根選別の精度が悪くばらつきが多く見られる。フランス産球根生産を行っている一人である。

No1

オーナー農家 クリンク(兄)



兄弟で農家をやっている。経営は別々だがこの兄は投資力に驚いた。1週間前に完成したおよそ、200坪くらいの倉庫(作業所)にはポーランド人が働いていた。また、最新の重量選別機を導入している。

外国人労働者を雇うのはオランダでは珍しくないが、その労働者の為に宿泊施設を建て、雇用の確保を行っている。

球根輸出会社兼育種家、オーナー型球根農家 **Van zan ten** (バンザンテン)



カサブランカ TYS を生産している 2 社のうちのひとつ。自社温室で現地定植前の養成球を試験栽培してウィルスチェックを行っていた。ティッシュカルチャーをかけた球根で T1、T2 の球根はウィルス感染の問題から水洗いしない。また、この段階で障害が多く発生している品種は廃棄を行っている。



12月5日

オランダ市場 アルスメール市場



およそ 200 年前飲み屋での出来事で客の 1 人が 1 つの花を売る際、値段下げながら値段交渉をやっていたことが始まりでいわゆる時計競りが始まった。

この市場は、2005 年に 4 つの会社が総合し作られた会社。スピードを重視したやり方で、縦に詰められた花はものすごいスピードで行き交えしている。

セリで落とされた花は、1 時間半までにバイヤーに手渡されている。将来的には地下にセンサーを埋めてスピードをもとめ人員削減に努めるということ。

輸出会社 **VAN DEN BOS** (ヴァンデンボス)

オランダ南西にあるこの輸出会社は、世界輸出量 2 番目だという。球根を高圧洗浄するためリンペンが剥げ落ちる。球根パッキングはオートメーション化され、人員が少ない。球根に対しての配慮が足りないと感じる。スピード重視やコスト削減重視の経営。





No3

輸出会社 P.O Onings オーニングス



世界最大の球根輸出会社。注目する点は、やはりパッキング。まず、日本などアジアに輸出する場合は必ず球根を洗浄し土を落とさなければ輸出できない決まりだ。今までの洗浄のやり方だとヴァンデンヴォス社と同じ球根リンペンが剥がれていたらしい。しかし、大きく改善した。洗浄のやり方を簡単に言えばやさしく洗うことで剥がれるのを防いだ。でもその分手間や人件費などがかかる。ピートモスは非常に質の高いものを使用。手作業のためパッキング作業も申し分ない。昨年までは、1 コンテナ 13 kgのピートを入れていたが今年からは 14 kgと多めに入れている。たった 1 kgの差だが何万何十万個とパッキングするとなるとこの 1 kgは大きい。某輸出会社と 55 セントも 1 コンテナの値段が違うという。



切花農家 QuaLily

オーニングス会社のすぐ近くある農家クアリリー。年間 220 万本栽培。3 軒の農家でグループを形成している。コンテナ栽培で 1 コンテナ 12 球入れ、運ぶのも機械、並べるのも機械、切って運ぶのもベルトコンベアーで機械。こういうやり方もあるのだと勉強になった。



No4

12月7日

輸出会社 V・W・S



北オランダ側にある輸出会社。

アイリス、チューリップ、ユリなどの切花栽培向け、ドライセール向けを輸出している。

ここもトータルシステムだが、ひと味違う。

農家来た球根は必ず乾いたかどうかを確認し、また洗浄。

洗浄は高圧洗浄ではなく、洗浄水をたくさん使いきれいに洗う。

パッキング時は、トータルシステムにセンサーを取り付けロット、サイズによってピートモスの入れる量を変えている。
(球のサイズによって1コンテナに入るスペースが違うから)



洗浄水のため池は大きく、とても気を使っていた。

大事なところは手作業で行っているイメージ。

No5



オーナー型球根農家・切花農家 バッカー

今現在、温室ハウスを建てている。これは、世界初の原母球根生産を隔離栽培で行おうとしている。

そして、オランダ、フランス、ニュージーランドで球根生産をしており、自社の切花栽培でも使用。



時期によって、産地の球根を使いわけ毎年の品種を変えずにブレない人だと思った。

自分で科学肥料を調合し、その品種に合った肥やしをやっている。

ここの農家の経営力にはすごい参考になった。

切花農家 エンティシュ

球根生産、増産のライセンスを自ら購入、球根委託生産を行っている。メッセージ性をはっきり示している農家である。

輸出会社 Zabo Plant (ザボ・プラント)

この時期はどこの会社は忙しく、ザボは24時間稼働している。1時間当たり360~420箱をパッキングしている。2012年に新しい倉庫を建て改良していた。

以前のパッキング方法は、コンテナの下にピートを入れその中に球根をそのまま入れて上にピートだった。いわゆるサンドウィッチ状態。しかし、改良され他の輸出業者と似ているやり方になった。



オーナー型球根農家 クリンク (弟)

初日に行ったクリンクの弟だ。

リンペン球の1作2作を作っており、その面積は85ha。50haは販売用。

品種は、マーロン、コンパニオン、ロビーナ、カティーナ、セバン、スノーボード、ルビアーノとなど、兄と違いオリエンタル品種が多い。(11品種オリエンタル)

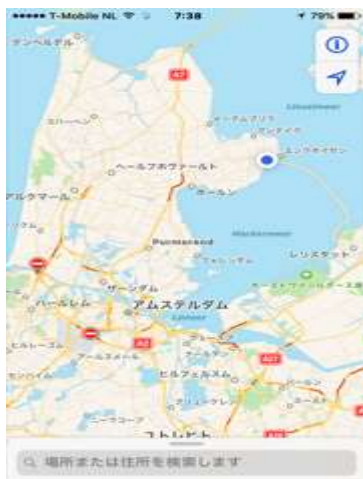
農家の天敵プランターゴが入っていると思われる物は、分けて選別、消毒など行っている。今年は去年より掘り取りが1週間も遅れて、あと18haも残っている。

12月8日

育種会社・輸出会社・オーナー型球根農家 De JONG (デヨング)

特徴のある品種育成を行い、世界的な育種家。

ここのパッキングも新しく導入した、トータルシステムと古いタイプがある。これは、ロットに分けてパッキングをし、やはり古い方が人目の配慮があり丁寧だ。パッキング前にコンテナも同時洗浄しシートもここが一番湿っていて気を使っていると思われる。



No7



輸出会社 Jan De Wit (ヤンデビット)

日本向けの輸出は歴史が古く営利用アイリスはトップシェア。ここは在来系の品種に力をいれているらしい。

日本でこの球根を買う際は、Jaw-セレクトと表示されている。それは、この社長が自家の球根には自信があるから表記させてくれと頼んで行ったことである。裏を返せばリスクも大きく伴うが……。しかしやっていることは丁寧な仕事だった。日本に

輸出の際は、土がつくと厳しいから日本向けの洗浄をしている。

ピートモスも安い機械向けの物だが、非常に品質のいい物を使っていた。パッキング入れ時も手作業で良かった。

オーナー型球根農家 オリエンタルアンダイク

元カサブランカ TYS を作っていた会社。プランターゴ問題で経営危機に陥ったが脱却の兆しあり。球根生産の能力がもともと高く丁寧な仕事をしている。隔離選別、パッキング場を持っていて母球と鱗片を分けて作業していた。

オーナー型球根農家 トーマス

プランターゴ問題で苦しんだ農家の一つ。作れるオリエンタル系がないと言っていた。

12月8日

輸出会社 C.STEENVOORDEN (スティンボーデン)

この会社も 24 時間稼働。昔は、鉄砲ユリの育種もしていた歴史のある会社だ。



最初に、冷凍のやり方が工夫されていた。ここは説明場所がうるさく聞き取れなかった。(-_)zzz とにかく冷蔵庫は、酸素が薄いところだった。

この会社も、去年からトータルシステム導入でピートモスは変えず今までのピートモス使用している。

輸出会社 VAN DEL ZON (バ ンデルゾン)

ここは残念なことに 6 月火事になり、パッキング倉庫など燃え今は倉庫を借りている。

パッキング会社 ロマイセ

丁寧なパッキングをしていた。VANDELZON のパッキング委託を受けていた。



洗浄専門会社 ウォーレンダム

洗浄はレベルが高い。根っこごと洗浄し根っこまできれいに洗浄されていた。

一番気を使っていたのが洗浄水。今まで見てきた物よりも洗浄するための運河が一番長い。これは、汚れなどが沈殿するし長ければ長いほど沈殿率も高くなる。パッキング時も手作業が一番ゆっくり入っていて、丁寧でものすごく好印象。

オーナー型球根農家 World Flower (ワールドフラワー)

ここでも 72°Cの温度消毒をされていて、リーロップと同じ UV 消毒をしていた。

球根選別機も 2 台あり非常に丁寧な仕事だった。そのため、すごく球のサイズが揃っていた。



ここで初めて球根の掘り取りを見せてもらった。

トラクター1台で掘り、2台で運ぶ作業。土は砂地で、海からすごい近くで作られている。

球根というのはオランダだと 10 月中旬まで青々した葉っぱで1週間後には黄色になりそこから枯れ始める。枯れないと球根は充実しないという。



オーナー型球根農家



ホップマン

この農家はカサブランカ TYS を作っている 2 社のうちの 1 社だ。60ha 南オランダで北オランダでは 18ha の種球を作っている。種球と大きい球と倉庫を分けて保存し、工夫が見える。プランターゴにも気を使い、消毒時に水と塩化ナトリウムを混ぜてプランターゴ消毒をしていた。画像の青い装置がそうだ。

球根選別作業は長いレーンでしっかり行っていた。皿の重量選別で回るタイプ。人員も多く、配慮も丁寧で好印象。さて、時間を取ってもらいカサブランカについて話をした。

ホップマンとしてはやめたそうだった。なぜなら球根農家としては、カサブランカが作っていて一番儲からないと言われた。

以上 No9